

知識探訪

多民族社会の横顔を読む



【第17回】

市川昌広
(高知大学準教授)

サラワク先住民の「恐ろしい」世界

クアラルンプールで華人の女性と話をしている、これからサラワク州に行くことを告げると、ぎょっとした顔をされたことがある。「あんな山奥で野蛮人が住んでいるところに何しに行くのだ」と聞く。イバン人のロングハウスで調査をするという、「ああ、恐ろしいこと」。まるでとって食われてしまうとも考えているようだった。このような会話は、サラワク州の州都クチンでさえなされる。やはり、都会に生まれ育った華人女性と話しているときに多い。イバン人をはじめとする先住民の農山村は、彼女らにとって恐ろしいところなのである。

先住民の暮らしは、ときどきテレビで放映される。うっそうとしたジャングルに棲むさまざまな虫

をもつ村もある。

恐ろしいイメージは、儀礼の際、いけにえに豚や鶏を奉げることからもくるかもしれない。こちらは今日でも普通にみられ、鶏がいけにえにされることは日常茶飯事だ。焼畑での山の伐採、籾まき、害虫駆除の祈願、収穫の始まり、収穫米の保管など稲作作業の折々に儀礼をおこない、そのたびに鶏が使われる。お祭り、シャーマンによる病の治療、死者がでたときにも必須だ。生贄の鶏の血は儀礼の参加者の額につけられる。豚はより重要で大きな儀礼のときに使われる。大切な決めごとの善し悪しを、豚の腹を開き、内臓に浮かぶ血管のはしり方で占う。こういった風習は、都会暮らしに慣れた人々にはいかにも不気味である。

首狩り・いけにえのイメージなお近年は都市化進み、風習消えゆく

やへび。森の小道を山刀を携え足早に歩く男たち。山での狩猟や採集、川での漁撈。森の一角が切り開かれてつくられる焼畑。道路ではなく、川を手漕ぎのボートで進む移動。こういった映像が都会人のもつサラワク山村のイメージを作っている。

イバン人をはじめとする多くの先住民が、かつて首狩りをしてきたことも恐ろしいイメージ作りに一役かっている。敵の首を狩ることにより、霊的な力と村社会での権威をえていた。イギリス人によるサラワク統治が進み、19世紀の終盤以降、先住民グループ間の争いがおさまってくると首狩りも少なくなった。私が調査している村でも、古老は「おやじの代ではなかったが、おじいさんの代ではやっていた」などと話してくれる。第二次大戦が終わったとき、敗残する日本兵の首を狩ったというエピソード

しかし、こういった「野蛮さ」や「不気味さ」を感じさせる暮らしも、近年、急速に変わりつつある。サラワク州でも都市化が進み、道路が山の奥深くまで広がりつつある。次第に交通手段として自動車が必要になってきている。若者たちは村から都市へ流れでて、村では過疎化や高齢化の兆しがみられる。農業は次第に小規模になり、稲作儀礼も簡略化されたり、消えつつある。農薬や肥料の普及も儀礼の必要性を失わせている。キリスト教が広まり、アニミズム信仰が少数派になりつつある。もう、20、30年もすれば多くの先住民たちは華人と同じように都会生まれ・育ちになる。「恐ろしい」世界も徐々に失われていくのだろう。

【執筆者プロフィール】1962年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科修了。博士(人間・環境学)。東南アジア島嶼部の先住民の森林や土地利用について研究してきた。現在は、日本の山村の過疎化・高齢化問題にも興味を持っている。